「経験としてのスポーツ」に関する研究： デューイ経験概念の再評価から

高橋 徹

Toru Takahashi: A study of “sport as experience”: An attempt to re-evaluate Dewey’s concept of “experience”. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 56: 297-311, December, 2011

Abstract : The purpose of this study was to re-evaluate the concept of “experience” and “education” presented by J. Dewey in order to better understand the concept of “sport as experience”. Dewey’s ideas of “interaction” and “continuance” are the representative concepts upon which his theory of “experience” is based. Such experience may arise from the interaction between an organism and its environment, and is linked to past, present and future experience. Through this concept, Dewey explains the process of experience and concludes that education proceeds through a stack of experience. The present study also considers the concept of “experience” as applied to “experience of sport” in terms of both process and substance, and subsequently the relationship between sport and the education process.

“Experience of sport” arises from constant interaction between a moving body and its environment, and the process has two stages: the “first experience” and the “secondary experience”. The former stage involves direct experience and the latter is a reflective stage. Substantially, “experience of sport” is a type of consciousness experienced by individuals when they interact. In other words, it cannot be understood by an observer, but only through individual experience.

Individuals may acquire “experience of sport” from every other experience and gain an overall picture through self-reflection. This “an experience” proposed by Dewey. A significant stock of sport experience can be gained over time, and this experience is held over thereafter. Such a process of consecutively reconstituted experience, i.e. the process of development through experience, is the educational process envisaged by Dewey. Thus, “experience of sport” allows for the possibility of educational development, so that individuals may gain new experiences and undergo successive developmental processes. The concept of “an experience of sport” is crucial for appreciating the importance of sport education and for extending the avenues of human education.

Key words : experience, experience of sport, education of sport

キーワード : 経験, スポーツの経験, スポーツの教育

1. 序

1.1 スポーツ経験の再評価

スポーツを「スポーツの経験」として捉える考え方の背景には、アメリカのプラグマティズムの思想がある。プラグマティズムにおける「全人的教育」の理論は、身体に対する従来の哲学的認識に対して、「経験される身体」に内在する独自の人間学的意味に関心を持つアプローチとして人間

の身体的存在を再度考えるための出発点を準備したのである(井上, 1998)。また、スポーツの教育的価値についても、結果としてもたらされる人間の全体的な発達に加えて、スポーツの経験の過程に見出される「発達の論理」^{註1)}には回収することのできない多様な意味として評価されることは、教育哲学や体育・スポーツ哲学の研究において既に指摘されているところである。

矢野(1999)は身体運動の中に、運動を知性によって捉えるという「経験」の次元を超えた

「体験」の次元があることを指摘しており、その運動体験の中にこそ教育における大切な意義が隠されているとしている。それはすなわち、優れた運動体験からは「発達の論理」に回収できないような「溶解体験」^{注2)}や、言葉では言い表すことのできない「生成の世界」^{注3)}がもたらされるというものである。

久保（2009）も矢野の理論を援用しつつ、「スポーツ運動」体験^{注4)}と意味生成という観点から、スポーツにおいて行われる身体運動、まさにその瞬間において生じる意義を検討し、『『スポーツ運動』自体のその瞬間に、重要な意味生成の体験が生起している」（久保，2009，p. 193）と指摘している。また、深澤・石垣（2010）の研究においても、スポーツにおける意味生成の可能性を「溶解体験」だけでなく「拡大体験」^{注5)}に照準することで考察している。

これらの研究ではスポーツを「体験」^{注6)}として捉えることで、手段-目的関係に支配されない次元における世界との対峙が明らかにされ、教育の枠組みの中でそうした体験をすることの重要性が示されている。その理論的批判の要点は、従来の体育・スポーツ理論に対する問題提起、すなわちスポーツという活動を通して経験しその経験によって学ぶというプラグマティズムにおける「経験としての身体活動」の概念においても、身体運動を十分に経験することの意味、あるいは身体の運動を通して人間の生き方と全体的に関わることの意義が十分に考慮され、正当に評価されることはなかったという課題である。従ってそこには、スポーツという身体活動の経験に内在する教育的価値に関して、再度、プラグマティズムの「経験」概念を見つめ直す必要性が見えてくるのである。

プラグマティズム思想の中でも、特に経験を通して学習を重視し、「経験」という概念に論及した人物としてJ. デューイが著名である。デューイの理論展開の中心は「経験」概念、および「教育」概念であるが、その「経験」概念の特徴は「相互作用の原理」と「連続性の原理」に見ることができる。彼によれば、経験は有機体と環境との相互作用によって生じる結果であり、そうした

経験が過去-現在-未来へと連続的に繋がっているとされる。彼はこの概念を通して、経験が生じる過程を明らかにするとともに、経験を積み重ねることの結果として教育が生じるとした。なお、この身体と環境との相互作用についての論及は、デューイのプラグマティズム思想の潮流を背景に持つJ. ギブソンの「アフォーダンス理論」^{注7)}においても見ることができる。

本研究では、スポーツのアフォーダンス理論^{注8)}の視点を基点としつつ、デューイの「経験」概念、「教育」概念を中心としたプラグマティズム思想の再評価を試みることにする。それはすなわち、プラグマティズムの影響を受けつつ、スポーツの知性化のステージにおいて出現した「スポーツの経験」の概念を再評価することで、「スポーツ」の教育を「スポーツの経験」の教育として捉え直し、その意義を改めて問い直す試みでもある。

1.2 研究の目的

本研究の目的は、デューイの「経験」、および「教育」概念を再評価しつつ、スポーツの経験それ自体に内在する教育的価値を改めて問い直すための前提について考察することである。本稿ではデューイの「経験」概念、特にその中心的論旨である「相互作用の原理」、および「連続性の原理」を検討することで、スポーツの経験の本来的な意味について検討する。

デューイの「経験」概念では、経験が生じる過程が明らかにされ、経験を積み重ねることの結果として教育が生じるという結論も導き出される。このデューイの理論に依拠するならば、スポーツの経験の過程もまた教育の過程と無関係ではないのである。

2. スポーツの「経験」概念

2.1 経験概念の原理

デューイは経験について、「経験は真空のなかで生起するものではない。言うまでもないことである。経験を引き起こす源は、個人の外にある。

経験はこれらの源泉によって、絶えず養い育てられている」(デューイ, 2004, p. 56) と述べている。すなわち、あらゆる経験の源となるものは、環境とその環境の中で生きる有機体との相互作用であり、この相互作用の不断の連続こそが全ての経験を構成している源泉なのである。

こうした環境と有機体の関係とは、能動的な面では試みることであり、受動的な面では被ることであり、そこには能動的であると同時に受動的な関係が成り立つ。しかし、相互作用に対しては、「有機体が環境に働きかけて生じた結果の影響を受け」ということ、すなわち、有機体と環境との相互作用の結果として生じた変化に有機体の影響を受け、自らも変化するという有機体の能動的活動に論点が置かれている」(上條, 1984, p. 24) という見解も示されている。このことから、相互作用が生じる過程では、有機体が環境からの条件を引き受けそれに適応するのではなく、有機体の側からの環境への働きかけが前提となって、それによって環境に生じた変化を結果として有機体は被るという流れが成り立つと考えられる。

「相互作用の原理」では、有機体自らが能動的に活動することによって環境を変化させるとともに、そうした環境の条件に対応する形で自分自身との関係をも変化させることが示されており、この有機体と環境とのやり取りの過程を通して経験が生まれるのである。なお、デューイの用いる環境という言葉に内包される意味は一般的に用いられるような有機体の周囲の事物 (surrounding) に限定されるものではない。デューイは環境を以下のように規定している。

「環境」environment とか「生活環境」medium という語は、個体をとりまく周囲の事物より以上のものを意味する。それらの語は、周囲の事物がその人独自の活動傾向に対してもつ特定の連続関係を意味するのである。もちろん、無生物もその周囲の事物と連続している。しかし、比喩的に言うほかは、それをとりまく事情は環境とはならない。というのは、無生物は自己に影響を及ぼす力に関与しないからである。とこ

ろが他方、生物、とりわけ人間の場合には、彼から空間的にも時間的にも遠く離れている事物が、彼の身近にある事物よりも、より確実に彼の環境を成すことがあるのである (デューイ, 1975, p. 26)。

環境とは、どのような状況のもとであっても、個人がもたされる経験を創造するうえでの個人的な欲求、願望、目的、そして能力との相互作用がなされるための条件なのである。たとえ空中に楼閣を築くとしても、その人は、空想のなかに築く構想した対象物と相互作用しているのである (デューイ, 2004, p. 64)。

このようにデューイは、有機体に何らかの影響力を持ち、変化を与えるような事物を環境とした。例えば、水が魚の環境であるのは、水が魚の水中活動に影響し、魚独自の構造や機能に関わってその活動を条件づけているためである。仮に水という環境を取り外した場合に魚は生きていけなくなることから、水は魚の生命活動に対し強い影響力を持っているのである。そして人間の場合は、目の前にある事物やメディア、書物をはじめ、脳裏に描かれる観念の世界、および空想までもが環境になり得る。すなわち、上條 (1984) が述べるように、デューイにとっては「ある有機体との特定の相互作用の場を形成し、特有の活動の場を構成する要因となるもの」(上條, 1984, p. 23) 全てが環境なのである。

こうした「相互作用の原理」と並ぶデューイの経験概念の特徴としては、経験の「連続性の原理」が挙げられる。経験の連続性とは、現在の経験が過去の経験から何かを受け取るとともに、将来の経験に何らかの影響を与えることを意味する。それはすなわち、デューイが、「経験は継続して生起するが、それは生物と環境的諸条件の相互作用が、生命過程そのもののなかに含まれているからである」(デューイ, 2003, p. 52) と述べているように、人間は生きていく中で常に経験しているということであり、環境に働きかけ、それによって変化する環境からの働きかけに応答し、さらに

環境に働きかけ返すという繰り返しによって人間は生きているのである。従って、日常生活のあらゆる出来事（仕事、娯楽、休養、学習など）をはじめ、冠婚葬祭、スポーツ、旅行、病気による身体的変化、喜怒哀楽の感情の変化など、平凡な事柄から大事に至る全ての出来事の一切が経験ということになる。過去-現在-未来へと繋がる相互作用の不断の連続が経験の「連続性の原理」である。

2.2 スポーツの経験における相互作用

有機体と環境との相互作用によって生じる結果が経験であるとしたデューイの経験概念、それをスポーツの経験として考察していくにあたり、「有機体」と「環境」という言葉が指示する意味内容をデューイが示したままに解釈するのは避ける必要があろう。なぜなら、スポーツは有機体として括られる生物全般が行うものではなく、人間のみが行う活動であり、その活動が行われる環境も人間の活動のみを条件づける存在だからである。

スポーツとは身体を通して行われるものである。しかし、スポーツは何もない空間に存在することはなく、それは身体とともにその外的世界が存在していることを前提にしている(高橋・井上, 2009, p. 110)。それはすなわち、スポーツにおける人間は身体的存在として捉えられるとともに、その身体の周囲の外的世界を環境として捉えるということである。従って、スポーツにおける相互作用を明らかにすることは、身体とその身体を取り囲む外的世界（環境）との相互作用について考察することである。

先述の「相互作用の原理」において、有機体の能動的な働きかけが強調されたのと同様に、スポーツにおいても環境への能動的な働きかけが前提となり、その結果として変化する環境に合わせて自らのあらゆる行動を修正することが求められる。それはすなわち、スポーツを行う際、身体に静止の瞬間が存在することはなく、行為が関わることで環境の新たな局面が開け、それに応じる形で身体が新たな行為を生み出すという相互作用の連続が起きているということである。そして、スポーツにおいて身体から環境への働きかけが前提

となるということは、環境への働きかけが行動を通して能動的に行われているということでもある。すなわち、スポーツにおいて環境と相互作用する身体は単なる身体ではなく自ら能動的に動く身体なのである。そこで本研究では、こうした身体を「運動する身体」と表現することとする。

水泳を一例として考えるならば、運動する身体と「水」という環境との相互作用を通して水泳は成立していると言える。水の中に何も行為することのない身体が存在していても、それは水泳ではなく、また水の無いところに運動する身体だけが存在していても水泳とはならない。水の中に運動する身体が存在している状況が水泳と呼ばれるのである。すなわち、水泳（スポーツ）とは運動する身体と環境との相互作用を通して成立しており、その相互作用の結果として水泳（スポーツ）という経験が生じるのである。

以上、相互作用を通してスポーツの経験を成立させる身体は単なる身体ではなく運動する身体であるが、ここではスポーツにおいて運動する身体を取り囲み、その身体の相互作用の対象となる環境についても明らかにする必要がある^{注9)}。

スポーツにおける環境とは、傍から見れば全く同じ環境であっても、個々人の身体が異なるように、運動する身体と繋がることで環境もまたそれぞれに異なる意味を与える存在となる(高橋・井上, 2009, p. 114)。それは、「個々の有機体にとって、環境は有機体と同様にそれぞれ異った構造と機能をもっている」(上條, 1984, p. 23)としてデューイの環境の概念において既に示されていることである。従ってスポーツにおける環境とは、運動する身体と相互作用し、その身体に特有の運動の場を構成する要因になるものと考えることができよう。

なお、このことは「逆上がり」という身体運動における鉄棒と人間との関係にも見ることができ。鉄棒を知らない人間が三辺で構成された鉄柱（鉄棒）を見たとしても、それを鉄棒と認識しそこで逆上がりをするとは考え難い。その人間は鉄柱（鉄棒）を気にも留めないか、もしくは全く違う用途に用いる物だと考えるかもしれない。この

状況は、鉄柱（鉄棒）が逆上がりをするための媒体として秩序づけられたとき、初めて鉄棒という存在になることを示している。人間が三辺の鉄柱（鉄棒）を見てそれを鉄棒だと認識するのは、過去にそれを使って逆上がりをした経験から、それに逆上がりができるという機能があることを知っているためである。すなわち、傍から見れば日常の他の環境と同じ環境に見えたとしても、スポーツという視点を通して見た場合、運動する身体との関連の中で環境は秩序づけられるとともに、そこでは日常では触れることのない意味が発見され、その環境は「スポーツの環境」となるのである。

鉄棒は「逆上がりをする」という運動する身体が存在しなければ鉄棒の意味を持たない単なる鉄柱だが、反対に鉄棒の存在こそが人間に逆上がりという行為を意味づけているとも言えよう。すなわち、環境もまた運動する身体を規定しており、どちらも一方なしに他方は存在しないのである。従って、スポーツにおいて運動する身体と環境は物質的次元での関係よりもさらに密接で、いかにしても切り離すことのできない恒常的な相互作用を通して成り立っている存在なのである。

以上より、スポーツの経験とは運動する身体と環境との相互作用から成り立つものであり、その経験を構成している運動する身体と環境もまた相互作用なしには成立しないという相補関係がスポーツの経験の存在根拠となっている。次節では、そのスポーツの経験をデューイの示した経験の二つの段階を通して読み解くとともに、スポーツの経験における運動者の経験内容について考察する。

3. 経験の過程とスポーツの経験

3.1 経験の過程

デューイによれば、人間と環境との相互作用から構成される経験には二つの段階があるとされる。それは「第一次経験」と呼ばれる「最初の粗雑な、大まかな経験」（中野，1998，p. 14）の段階と、「第二次経験」という「体系的思考の介入

によってのみ経験される」（デューイ，1997，p. 23），派生的で、洗練された産物としての段階である。「第一次経験」とは思考が介入する以前の直接的な相互作用の段階であり、「粗雑で、巨視的で、生硬な主題」（デューイ，1997，p. 23）が生じるだけで分析されていない状態の経験である。この段階では経験者自身が環境と共に相互作用を成立させ、その相互作用の中に取り込まれているため、そこでは主体と客体という二元的な区別が存在しない主客未分の不安定、不確定な状態が生まれる。そして、経験者はそこに疑問や不安を抱くことで反省（思考の介入による分析）をする。これにより、「第一次経験」が「洗練された、派生的な反省の対象」（デューイ，1997，p. 23）として浮かび上がり、経験者はこの反省の主体となる。つまり、この段階において経験者は、「問題の対象となるものを詳細、精密にとらえようと、対象化の働きをするとともに、自らの既得の知識の中に、この対象の性格を説明する観念を探索する作業に励む」（亀尾，1979，p. 104）のである。この対象化と探索という二方向に向かう活動によって主客の対立が明確となり、その結果、経験が洗練されるという段階が「第二次経験」である。すなわち、『『反省』のために『第一次経験』を『対象』として浮かび上がらせてくる経験』（中野，1998，p. 15）が「第二次経験」なのである。

以上のように、デューイの示した経験概念では、人間の一切の経験が「第一次経験」と「第二次経験」とに分けられる。経験の過程において、人間は初めに「第一次経験」という思考が介入していない直接的な経験をし、その後「第一次経験」を対象とした思考の介入という「第二次経験」、反省的经验に至るのである。そして、派生的産物としての「第二次経験」は再び日常の直接的な経験、「第一次経験」の中に取り込まれ、そこでの経験を「以前に増して意図的に制御可能な、それ故に多くの意味に充ちた仕方経験され得るものとする」ことに寄与する」（好並，1990，p. 132）のである。すなわち、デューイの経験概念では、「第一次経験」から「第二次経験」へと向かうだ

けでなく、「第二次経験」から「第一次経験」へと向かう道筋も示されており、この経験における二つの段階の往復関係が繰り返されることによって経験が豊かな意味を持つとされる。

なお、特に考慮すべきは、「第二次経験」が「第一次経験」から所与を提供され、それを対象とすることで構成されているという点である。経験の一般的な解釈では、「知的・認識的要素を含む二次的经验が、すぐれて『経験』といわれる」（亀尾，1979，p. 104）が、その経験の基礎には主体と客体という二元的な区別が存在しないが故に、単に指示することのみが可能で直接的には記述し得ない「第一次経験」が存在するのである^{注10}。

「相互作用の原理」を含めた経験の過程における二つの段階を踏まえ、デューイは人間の経験について以下のように述べている。

経験されるものは経験ではなく自然（環境）、一石、植物、動物、病気、健康、温度、電気などである。ある方法で相互作用している諸事物は、経験である。それらは、経験されているものである。他の方法で、他の自然（環境）の対象—人間有機体—と結びつけられて、それらは、いかに事物が経験されるかでもある（括弧内筆者）（デューイ，1997，p. 19）。

デューイによれば、人間は経験を経験するのではなく環境を経験するとされる。これは、相互作用の対象となる環境が経験そのものであるとともに、それは経験されているものでもあるという指摘である。また、「デューイにとっては、経験されるものは『何か（what）』と問うよりも、その事態がどのように変化したか、または変化していくのか、という、変化の『いかに（how）』を考えることが重要であるとされる」（渡辺，1990，p. 144）のであり、そこでは結果としての経験内容以上に経験される過程に焦点が当てられているのである。しかし、「いかに経験するのか」を問うことのみが経験に関する考察の全てとは考え難い。具体的な経験内容として「どのようなことが

経験されているのか」を問うことも、経験を考察する上では重要な課題と言えよう。特にスポーツの経験を考察するにあたり、「スポーツでどのようなことが経験されているのか」を問うことは、スポーツする人間を理解することにも繋がるという意味において、それはスポーツの経験と教育について考察することと無関係ではないのである。

そこで次節では、スポーツの経験内容に関して、経験の過程の二つの段階の中でもその基礎的な経験としての「第一次経験」に着目し考察することとする。

3.2 スポーツの経験

デューイが問うことのなかった経験内容については、「人間は何らかの仕方で自己をとりかこむ『環境』ないしは『世界』から働きかけられ、『環境』の働きかけに応答し、さらに『環境』に働きかけつつ生きている。このような過程の中にあって、人間の『自己』が『環境』のあり方に対してもつ意識の内容が一般的意味における『経験』である。デューイの経験という概念の理解もこのような一般的理解と変るものではない」（讃岐，1980，p. 91）という指摘が見られる。デューイは経験されるものは環境であるとしたが、渡辺（1990）によると、経験という出来事には必ず「感じ」が伴うものであり、人間はその「感じ」を感じ取ることで意味とすることができるとされる（渡辺，1990，p. 143）。すなわち、環境との相互作用という出来事に伴う、人間にとって意味として理解され得る「感じ」、それこそが人間の経験内容そのものである。

これは例えば、運動者が水泳の経験を語る際に、「水を経験する」ではなく「水泳を経験する」と述べることから明らかである。この「水泳」というのは運動者にとっての「出来事」であり、一義的には経験した出来事（水泳）があるだけで、「水」はその経験の脈略から派生し、後に出来事の関係性の中から運動者に把握されるものである。従って、運動者に経験されるのは環境であっても、環境との相互作用という出来事の中で生じ運動者に感じ取られ、意味として理解され得る

「感じ」, それこそが運動者にとっての「スポーツの経験内容」なのである。

なお, スポーツの経験内容を明らかにする一つの試みとして, アフォーダンス理論を基盤とし, スポーツにおいて運動する身体を基点とする外的世界を規定する「スポーツの身体環境」(高橋・井上, 2009) 概念も参考となる。スポーツの環境は「単なる環境ではなく, 運動する身体と環境によって作り上げられた『身体環境』であり, それに触れることで運動者自身にとっての意味を探究・発見することが可能となる。」(高橋・井上, 2009, p. 116) なお, そこで発見される意味はアフォーダンスといわれる人間の行動に直接関係する環境の性質, すなわち「生態学的環境」の性質, および生態学的性質とは質的に異なる「気分」や「身体感覚」である。

この運動者が探究・発見する二つの意味は, そのままスポーツの経験内容に置き換えることも可能であろう。すなわち, これらは環境との相互作用という出来事の中で生じ, 運動者に理解される意味と言えるのである。特に後者の意味について

はデューイ (2003) も, 「怒りや憎しみでさえ, 部分的には, われわれのなかにではなく, われわれによって生ずるのである。すなわち, われわれが唯一の原因なのではなく, われわれ自身の構造が原因を構成する一要素なのである」(デューイ, 2003, p. 336) と述べるとともに, 思考, 感情, 感覚, 目的, 衝動なども環境との能動-受動関係の協力的な役割の中に見出されることを示唆している。

なお, スポーツを経験することを通してのアフォーダンスの知覚, および気分や身体感覚の獲得は, 経験の過程において思考が介入する以前の直接的な経験とみなすこともできよう。水泳を考えた場合, 運動者は水の軟らかさや硬さ, 水の冷たさといった水のアフォーダンスを自身の身体が水と触れ合った瞬間, つまり水と相互作用したその瞬間に知覚する。そして, 水の中を泳いでいる最中に水と触れ合うことの心地良さを感じるのである。すなわち, これらは反省以前の直接的な経験である「第一次経験」であり, 運動者は後にこの経験を対象とした反省をすることで, 水に触れた

図1 第一次経験としてのスポーツの経験構造

心地良さ、水の冷たさ、泳ぐということの意味を語ることができるのである。

以上、これまでの考察をもとに「第一次経験」としてのスポーツの経験内容、およびその経験を構成する相互作用を「第一次経験としてのスポーツの経験構造」として表したものが図1である。

スポーツの経験とは、運動する身体と環境との相互作用が不断に連続することで成立しており、運動者がその相互作用の中から獲得する意味、すなわち相互作用に対して運動者が持つ意識内容がスポーツの経験内容である。運動者は自らの運動する身体と環境とが相互作用することによって作り上げられたスポーツの環境において、日常の環境では接触することのない非日常性（危険性や困難性）と対峙しつつ、外部からの観察では理解できない、まさに運動を経験した者だけが接触することのできる個別的かつ多様な意味を見出すことが可能である。なお、先述したアフォーダンスの知覚と気分の獲得は、あくまでもその経験内容の一つの側面を提示したに過ぎない。なぜなら、これまでに考察したスポーツの経験はスポーツを構成する個々の身体運動の経験の側面であり、スポーツを身体運動の総体として捉えるならば、個々の身体運動の経験を対象にするだけでは捉えることのできないスポーツの経験も存在するためである。それは例えば、野球を経験するということが「バットを振る」「ボールを打つ」「ボールを捕る」「ボールを投げる」「走る」などの身体運動を経験することだけでなく、それらの個々の身体運動の経験を含めた総体としての「試合をする」という経験もまた野球の経験ということである。このような経験の統一、それをデューイは「一つの経験」という概念で示している。

4. 「一つの経験」とスポーツの経験

4.1 デューイの「一つの経験」概念

デューイは「経験」概念の中で、人間が生きているということは常に経験していることであり、平凡な事柄から大事に至る全ての出来事的一切が経験であるとしている。しかし、それらの大部分

は「いつ始まったのか分からないような経験や習慣に拘束され機械的にしか結びつかない経験」（西園，2001，p. 39）であり，こうした経験が「第一次経験」，すなわち直接的な経験とされる。

しかし，私たちは連続するあらゆる経験の中から，反省的思考を介入させることによってスポーツのみを取り出して認識し，「スポーツの経験」という一つの統一体として捉えることができる。それは，前後の経験との境界が曖昧で，始まりや終わりが不明確なスポーツに対し同一性を与えることができるということである。この同一性が付与され，統一された経験こそがデューイ（2003）の示す「一つの経験（an experience）」である。

「一つの経験」とは経験されるものが順調に完成に達するという経験である。デューイはそれを以下のように定義している。

経験された事柄が成就の進路を走るとき，われわれは一つの経験を持つのである。そのとき，そのときのみ，経験は内部で統合され，経験の一般的流れのなかで他の経験から区別されるのである。…中略…状況はいずれ完了するが，その完了は完成であって，中止ではない。このような経験は一つの全体であり，個性ある性質と自足性をもつものである。それは，一つの経験である（デューイ，2003，p. 52）。

経験には，あの食事，あの嵐，あの友情の破綻というような名前をそれにあたえる統一がある。この統一の存在は，その構成部分の多様性にもかかわらず，全経験に行き渡っている単一の質によって構成されているのである（デューイ，2003，p. 54）。

これらの定義から，「一つの経験」が「個性ある性質」や「単一の質」によって統一された経験であると理解される。しかし，ここでデューイが意図する「質」とはいかなるものであろうか。この「質」についてデューイは，「経験の不確定で，浸透する性質は，すべての確定的諸要因を一つに束ねるものであり，われわれが焦点をなすものと

して自覚し、それらを一つの全体にする諸対象である」(デューイ, 2003, p. 260)と述べている。すなわち黒柳(1997)も指摘するように、デューイの意図する「質」とは、経験を統一し得る「浸透する質」であり、それは機能上の分類で名称こそ異なるが、「感じ」「センス」「意義」「ムード」などと言われるものである(黒柳, 1997, p. 41)。

このように「浸透する質」によって統一された経験としての「一つの経験」、その経験に共通する特質を探索した西園(2001)によれば、その特徴は以下の四点であるとされる(西園, 2001, pp. 39-40)。

- 1) 継続性を持つ。
- 2) 認識的(知覚的)である。
- 3) 創造的である。
- 4) 感情的性質がある。

(括弧内筆者)

1) 経験の継続性とは、経験はその始まりから結末までの継続性を持っており、経験を一つの統一体としてまとめられるということである。2) 認識的(知覚的)な経験とは、「行動とその結果が、知覚のなかで結びつけられる」(デューイ, 2003, p. 64)ということ、すなわち自己の行動とその行動から引き起こされる結果を経験者自らが理解できるということである。経験は以前の経験から引き出された意味がその中に加味されたときのみ意識的に知覚内容となるが、3) 創造とは「これらの(以前の経験から引き出された)意味が現在の相互作用に至る道を発見できる唯一の通路(括弧内筆者)」(デューイ, 2003, p. 363)のことであり、それは「新しいものと古いものと意識的調整」(デューイ, 2003, p. 363)を意味している。4) 感情的性質とは、先に示した経験を統一する「浸透する質」のことであり、デューイが指摘するように「経験それ自体は、満足すべき感情的性質をもっている。…中略…経験は、秩序ある、組織された運動を通じて達成される内的統合と成就をもつ」(デューイ, 2003, p. 56)のである。従って、「感情的性質」という「浸透す

る質」があることで経験はまとまりを持った「一つの経験」となるのである。

以上、四つの特徴を持つ「一つの経験」については、『感情的性質』によってはじめて経験は目標までの筋道をたどり、問題は申し分けなく結論され『一つの経験』となり『美的』となる」(西園, 2001, p. 40)のである。デューイが「一つの経験は、美的性質をもっている。そうでなければ、その諸素材は、単一の、凝縮性のある経験にまとめられないであろう」(デューイ, 2003, pp. 77-78)と述べるように、「一つの経験」は「美的」性質を持つとされ、それは「統一性、全一性、リズムといった用語で規定される、経験を経験たらしめる総括的概念」(渡辺, 1979, p. 108)を意味している。

従って「一つの経験」とは、「浸透する質」によって統一され、一貫する過程を持つが故に「美的」な経験であり、連続する経験の流れの中で他の経験から際立って区別される経験なのである。

4.2 スポーツの「一つの経験」

野球というスポーツの経験において、野球を構成する個々の身体運動(「バットを振る」「ボールを投げる」など)から、それらの総体としての「試合をする」という活動に至る全てが野球の経験であることは既に述べた通りである。例えば、「ボールを投げる」経験は運動する身体とボールという環境との相互作用で成り立っていることから、野球を構成する個々の身体運動の経験はスポーツの経験だと言える。そして、個々の身体運動の経験を不断に繰り返した結果として「試合をする」という経験もまた成立しているのである。すなわち、身体運動の経験と、それらの身体運動の総体としての活動の経験は全く異なる次元のようであるが、どちらの経験も運動する身体と環境との相互作用が不断に連続するという、デューイの「経験」概念の二つの原理に当てはまる形で成立しているのである。

よって、不断に繰り返される「第一次経験」を「第二次経験」として反省するための対象として取り上げる際の経験の範囲、すなわち「浸透する

質」によって統一性と同一性が付与される際の、経験の時間的な長さや空間的な広がり異なるが故に、「ボールを投げる」などの個々の身体運動と、その身体運動の総体としての「試合をする」という活動が異なる次元のものとして捉えられるのである。「ボールを投げる」という瞬間的な経験も反省的思考が介入することで単一の「浸透する質」で括られるならば、それは「一つの経験」となり、また「試合をする」という時間的な長さや空間的な広がりに伴う経験も反省によって単一の「浸透する質」で貫かれた場合には「一つの経験」となるのである。

このように、連続する相互作用の一部分を統一体として貫くような「第二次経験」としての反省的思考の介入は、単なる経験をも「一つの経験」とする可能性を秘めている。毎日行うジョギングはそれを反省の対象としなければ、日常の他の経験と混じり合い、ただ過去へと流れていくだけの経験という意味で未完成の経験に過ぎない。しかし、走るペースをいつもよりも少し上げてみたり、走っている途中に見える景色に注意を向けたりするなどの些細なきっかけがあるだけで、そのジョギングは省みられ、日常とは異なった経験として単一の質で貫かれることで、「あのジョギング」と言われるような「一つの経験」となるのである。

日常の経験の多くは、常に同じ環境との相互作用を繰り返すだけの、目的もなく困難にも遭遇することのない活動であるため、そこでの経験が「一つの経験」とはなり難い。しかし、スポーツでは運動者が自らの能動的な活動を通して積極的に環境の非日常性（危険性や困難性）と対峙し、それを克服しようとする。従って、そこにおける環境との相互作用は日常的な他の経験と比べ、特異な際立った存在として強く意識される。それはすなわち、スポーツの経験が日常の他の経験以上に「第二次経験」として反省の対象に取り上げられる可能性が高いが故に、それは「一つの経験」への転化を内包しているのである。

またデューイが、「このような経験（一つの経験）において、それぞれの継続する部分は、後に

起きるもののなかに淀みなく、切れ目もなく満たされない空白もなく流れ入る。同時にそこには、各部分の自己同一性が失われることもない（括弧内筆者）」（デューイ、2003, pp. 53-54）とも述べているように、「一つの経験」としてのスポーツの経験は、次々と連続して起こる他の経験の彼方に過ぎ去ったとしても、他の経験の様に消え去りはせず、その経験の同一性が失われることはないのである。従って、「一つの経験」としてのスポーツの経験は、何らかの意味を持った経験として経験者の中に蓄積され、その経験への反省が後の経験へと生かされることになるのである。これはすなわち、スポーツの経験が一つの知識として蓄積され、後の課題解決に生かせるという意味において、スポーツの経験という知識が他の知識と同様に人間の学習過程や成長過程とも関係していることを示している。

5. 経験としてのスポーツ

5.1 スポーツと教育

「一つの経験」としてのスポーツの経験は後に起こる経験へと連続的に持ちこされ、そこでの経験に生かされる。このような経験の連続する過程が教育の過程であるとしたデューイは、その概念を以下のように定義している。

教育とは、経験の意味を増加させ、その後の経験の進路を方向づける能力を高めるように経験を改造ないし再構成することである（デューイ、1975, p. 127）。

ここでいう「経験の意味を増加させる」とは、ある活動と他の活動を相互作用させることでそれぞれの活動の幅を広げ、活動を深めるということであり、相互の活動の関連を知ることによって未来の活動のあり方を予想し、目的を達成する可能性を手に入れることを意味する（川合、1997）。従って、経験の意味の増加は「子ども（人間）が成長していく手段を手に入れること（括弧内筆者）」（川合、1997, p. 120）と解釈することもで

きよう。

またデューイは、「成長は生命に特有のものであるから、教育は成長することと全く一体のものであり、それはそれ自体を超えるいかなる目的ももたない」（デューイ、1975、p. 92）とも述べており、教育と成長を同義とした上で、その教育の目的について以下のように述べている。

(i)教育の過程はそれ自体を超えるいかなる目的ももっていない、すなわち、それはそれ自体の目的なのだ、ということ、および、(ii)教育の過程は連続的な再編成、改造、変形の過程なのだ、ということになるのである（デューイ、1975、p. 87）。

成長ないし発達についての誤った考え——すなわち、それは固定した目標に向かって進む変化だ、という考え——と関連している。成長は、それ自体が目的であるのではなくて、目的をもつものとみなされているのである（デューイ、1975、p. 88）。

このように、デューイは教育の目的を教育の外やそれを超えたところに設定する立場を批判する。そして、理想とすべき教育目的を「良い目的の判定基準」（デューイ、1975、p. 174）としており、「教育目的は、教育されるべき特定の個人が本来持っている活動力と要求（生得的本能と獲得された習慣とを含む）に基づいていなければならない」（デューイ、1975、p. 174）としている。なお、デューイの立場は教育の目的一般を否定し、無目的な教育をよしとする立場ではない。それはあくまでも、「設定される目的は、現存の状況（経験）の発展したものでなければならない（括弧内筆者）」（デューイ、1975、p. 168）ことを意味しており、個人の経験が考慮されずに外部から強制的に押しつけられるような目的を教育の目的としてはならないということである。すなわち、デューイは被教育者の現状を無視して外部から強制的に教育目的を押しつけるという教育の「外在的目的」を否定する一方で、被教育者の経

験に応じて目的を設定するという教育の「内在的目的」を支持する立場をとっている。

このデューイの立場から鉄棒運動の目的を考えてみると、鉄棒運動の本来の目的とは、「逆上がりをする」などの鉄棒そのもので行為することであり、これは教育の枠組みの中で考えた場合でも異なるものではない。しかし、教育においては「発達の論理」に裏づけられ、「体力の向上」「腕力の強化」といった結果としてもたらされる身体発達の側面が鉄棒運動の目的とされる時、鉄棒運動自体は目的ではなく鉄棒運動が目的を持つものとみなされており、従って鉄棒運動を行う運動者は鉄棒運動を行っているのではなく、鉄棒を利用しながらも身体発達を目指したエクササイズを行っていると言い換えることもできるのである。鉄棒運動を通して身体発達がもたらされることについて疑う余地はないが、その発達が教育目的とされるならば、それはデューイが批判する「外在的目的」となる。デューイの理論的立場を支持するならば、鉄棒運動の目的とは、運動者が過去に蓄積した運動の経験に応じて設定され、結果としての身体発達を超えて、鉄棒運動それ自体を行うことへと目的を向けることである。教育の目的とは「内在的目的」であり、「経験の連続的再構成の過程こそが教育（成長）の過程である」というデューイの主張はそこにその本質を伺うことができるのである。

5.2 スポーツの経験と教育

デューイの主張する「教育（成長）の目的は内在的目的である」、および「経験の連続的再構成の過程こそが教育（成長）の過程である」という見解をスポーツの経験を通して読み解くことは、スポーツの経験が人間の成長過程と無関係ではなく、スポーツする人間の教育可能性へと繋がるものであることを示すことにもなるであろう。

クロールの練習を一例として考えてみると、練習の初めの段階では、クロールを「手のかき」「足の蹴り（キック）」「息継ぎ」などのより細かい身体運動に分割することで、その身体運動の経験を少しずつ積み重ねるような練習を行うのが一

般的である。そこにおいて運動者は、「クロールで泳げるようになる」「手のかきを上手くする」といったことを目的として練習に取り組む。そして、運動者は身体運動の経験の積み重ねの中で「手のかき」にも様々な方法があることを理解するとともに、同じ「手のかき」であってもそれをより洗練化させようと努め、さらに「足の蹴り」などの他の動作との関連を知ることでクロールを習得していくのである。すなわちこれが、活動の幅を広げ、活動を深めるということであり、目的を達成する可能性を獲得するということでもある。その結果として運動者は個々の身体運動を身につけ、それぞれの動作の関連を理解することで、クロールで泳げるようになる。さらに、クロールで泳ぐという目的を果たした運動者は、クロールで泳いだ経験を土台として、背泳ぎや平泳ぎといった他の泳法を身につけるなどの新たな目的を設定できるようになるのである。

このようにスポーツを経験するということは、運動者が「自ら」運動する身体と環境との相互作用を引き起こすことなのである。運動者はある環境との相互作用によって新しい経験を獲得し、その経験を「一つの経験」という既知の経験、すなわち土台としての経験にすることで新たな環境との相互作用に取り組むこととなる。このように、未知から既知へ、既知から未知へ、そして再び未知を既知とし、それらを累積する経験の無限の発展が自己更新の成長過程であり、それこそがデューイの示す教育過程なのである。

運動者が自ら相互作用を引き起こすということ、それは自己という「内」側とその環境という「外」側を絶えず作り続けることでもある。運動者はスポーツの経験を通して、自己の「内」と「外」を区別し、その境界を「自分から」作り続けているのである。すなわち、運動者は環境と独自の関係を取り結ぶことで環境の意味を理解し、そこから運動する身体との相互作用に必要な意味を取り出すことになるのである。このように、運動者が「自ら」相互作用を引き起こし、自己の「外」側の環境の意味を理解するということ、それは言い換えれば、運動者が自己の「内」側を理

解するということでもある。なぜなら、自己の「内」側というものを何らかの形で当の運動者自身が理解していなければ、そもそも何のために、何を目指して、どのような環境の意味を取り出し、相互作用しなければならないのかが定まらないからである。つまり、自己の「内」側を運動者自身が理解することはスポーツの経験においてなくてはならないものであり、それはスポーツの経験が運動者の自己理解を深めることにも繋がることを意味している。

さらに、デューイは経験を通して教育（成長）が生まれるという見解にも留意すべき点があることを指摘している。

すべての経験が本当に教育的なもので、またすべての経験は同等なものであるということの意味するものではない。…中略…というのは、教育的ではない経験だっていくらかでもあるからである（デューイ、2004、p. 30）。

スポーツを経験するということは、ある特定の技能の発達に繋がる可能性はあるが、スポーツという非日常的な経験を積み重ねた場合、蓄積された経験の全てが教育的な経験とばかりは言えない。すなわち、「どのような経験も、つぎに展開してくる更なる経験の成長を阻止したり歪めたりするような影響をもたらしようでは、それは非教育的なものであるといわざるをえない」（デューイ、2004、p. 30）のである。

以上、「経験の連続的再構成の過程こそが教育（成長）の過程である」というデューイの見解は、「スポーツの経験」の教育可能性へと通じている。既に考察してきたように、「スポーツの経験」を構成するものは運動する身体と環境との相互作用の不断の連続であるが、スポーツは非日常的な活動であるが故に、運動者には単に日常生活を送る場合とは異なる形での環境の克服が求められる。そこにおいて運動者は、新しい環境を克服する中で新たな「一つの経験」を獲得し、その経験を基礎としてさらなる経験を獲得するという状況に直面する。すなわち、スポーツという活動は常に流

動するものであるが故に、そこでは絶えることのない環境との相互作用が生じ、運動者には常に環境の克服が求められるのである。それはまさに、相互作用が累積する無限の発展過程を自己更新の成長過程であるとし、それこそが教育過程であるとしたデューイの「教育」概念そのものののである。スポーツを常に新たな経験の獲得と絶えざる成長過程のプロセスと捉える時、そこにおいてはスポーツを経験する人間の教育可能性が潜在することを改めて主張することができるのである。

6. 結

本研究では、デューイの「経験」、および「教育」概念を再評価しつつ、その概念を「スポーツの経験」と「スポーツの経験の教育」として読み解くことを試みた。スポーツの経験は運動する身体と環境との相互作用が不断に繰り返されることで生じており、その経験の過程には「第一次経験」という直接的な経験から、反省的经验である「第二次経験」へと至る二つの段階が存在する。そこで経験されるスポーツの経験内容とは、環境との相互作用という出来事の中から生じ、運動者にのみ理解される意味、すなわち運動者が相互作用に対して持つ意識内容のことであり、それは外部からの観察では理解できない、まさに運動を経験した者だけが接触することのできるものである。人間は反省的思考を介入させることによって、こうしたスポーツの経験を連続するあらゆる直接的な経験の中から取り出して認識し、一つの統一体として捉えているのである。そのように統一され、一つに括られるスポーツの経験こそがデューイのいう「一つの経験」である。

「一つの経験」としてのスポーツの経験は、意味を持った既知の経験として経験者の中に蓄積され、後に起こる経験へと連続的に持ちこされる。従ってそこでは、既知から未知へ、未知から既知へという経験の連続的再構成の過程が作り上げられており、この経験の積み重ねを通した成長過程こそがデューイの示す教育過程なのである。以上、スポーツを新たな経験の獲得と絶えざる成長

過程のプロセスと捉える時、そこにはスポーツする人間の教育可能性を見ることができるのである。本稿での考察からは、運動者が「スポーツの一つの経験」をいかにして獲得できるのかを明らかにすることが今後の課題として挙げられる。それは無限に連続する様々な経験の中から取り上げられ自己の内に蓄積される「一つの経験」、すなわち経験としてのスポーツの価値を教育の枠組みの中で評価し、スポーツを経験する人間の教育可能性を開くことへと繋がっているのである。

注

注1) 「発達の論理」とは、有用性の原理に特徴づけられた労働のプロセスがモデルとされる。労働では全てが手段-目的関係に組み替えられるため、「あらゆる目的はその目的が実現されたときには目的であることをやめ、つぎの目的のための手段に転嫁してしまう」(矢野, 1999, p. 109) ことになる。すなわち、身体運動も発達の論理に回収された場合、何かの手段として把握され、評価されることとなる。

注2) 矢野は、作田 (1993) の提示した概念に基づき、「溶解体験」について、自己と自己を取り囲む世界との境界が無くなる(溶解する)ような体験を意味すると述べている(矢野, 1999, p. 110)。

注3) 「現在の欲望を否定して、未来に目的を設定し、未来のために現在を従属させる」(矢野, 1999, p. 109) という有用性の原理によって形成される事物の秩序を破壊するその瞬間を、矢野は「生成」と表現している。

注4) 「スポーツ運動」とはスポーツを構成する個々の身体運動のことであり、久保は佐藤 (1998) の示した「スポーツ≠身体運動」という等式に基づいてサッカーを例に挙げ、「サッカーという身体運動が存在するのではなく、キック、ドリブル、ヘディング、パスなどという形態の身体運動によってサッカーというスポーツが構成されている」(久保, 2009, p. 184) と述べている。

注5) 深澤・石垣は、作田 (1993) の提示した概念に基づき、「拡大体験」を、自己が周囲の集団や社会へと拡大する体験のことであるため、「溶解体験」とは異なり、自己と外との境界が拡大するだけで境界自体が消えることはない体験であると述べている(深澤・石垣, 2010, p. 100)。

注6) 矢野は知識として獲得され得る「経験」と明確

に区別した上で、「体験」を何らかの目的を持った行為や、何らかの結果を導くための活動とは無関係に世界と対峙し、新たな世界との接触や発見、能力や意味を獲得することであり、それは知識として対象化、分節化し、自己の中に蓄積することが困難なものと指摘する（矢野, 1999, p. 108）. なお、「経験」と「体験」との概念比較については、本稿の意図からは外れるため考察を避けることとする。

注7) 「アフォーダンス (affordance)」はアメリカの知覚心理学者 J. ギブソンが提示した用語である。この言葉は「与える」を意味する動詞「afford」を名詞化したものであり、ギブソンの心理学研究の中心を成す概念として、動物（人間）を取り囲んでいる環境に潜む意味を表現した造語である。すなわち、地面は歩くことを支え、断崖は落下の危険を持つように、環境が動物に対して与える意味や価値が「アフォーダンス」であり、それは動物に特定の方法で行動する機会を与えるものである。

注8) アフォーダンスを体育・スポーツの視点から意味づけた「スポーツの身体環境」概念は、スポーツにおいて運動する身体を基点とするその外的世界を規定するものである。「スポーツとは運動する身体とその身体を取り囲む環境によって成り立っているものであるが、その環境は単なる環境ではなく、運動する身体と環境によって作り上げられた『身体環境』であり、それに触れることで運動者自身にとっての意味を探索・発見することが可能となる。」（高橋・井上, 2009, p. 116）

注9) 例えば、「水泳における環境」を広く捉えた場合、水だけでなくルールやタイム、対戦相手なども環境と考えることができるが、本稿ではスポーツにおける「身体環境」の視点から、「運動する身体を取り囲む外的世界」のみを環境として捉えることとする。

注10) デューイの「第一次経験」と矢野らの「体験」の概念との関連については、同質のものである可能性が示唆されるが、この点については本稿の意図から外れるため、考察を避けることとする。

文 献

デューイ：松野安男訳（1975）民主主義と教育（上）。岩波書店：東京。〈Dewey, J. (1916) Democracy and Education.〉
 デューイ：河村 望訳（1997）デューイ＝ミード著作集④経験と自然。人間の科学新社：東京。〈Dewey, J. (1925) Experience and Nature.〉

デューイ：河村 望訳（2003）デューイ＝ミード著作集②経験としての芸術。人間の科学新社：東京。〈Dewey, J. (1934) Art as Experience.〉

デューイ：市村尚久訳（2004）経験と教育。講談社：東京。〈Dewey, J. (1938) Experience and Education.〉
 深澤浩洋・石垣健二（2010）スポーツにおける意味生成論—拡大体験の可能性とその契機—。体育学研究, 55(1): 97-110.

ギブソン：古崎ほか訳（1985）ギブソン 生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探索—。サイエンス社：東京。
 井上誠治（1998）スポーツ経験の記述の方法。体育の科学, 48(10): 802-806.

上條信治（1984）デューイにおける有機体と環境との相互作用の原理。日本デューイ学会紀要, 25: 21-27。
 亀尾利夫（1979）〈経験〉概念の系譜の中で。日本デューイ学会紀要, 20: 100-105.

川合康文（1997）子どもの経験を重視した授業のあり方についての一考察。日本デューイ学会紀要, 38: 118-123.

久保正秋（2009）意味生成としての「スポーツ運動」体験の意義。体育学研究, 54(1): 183-196.

黒柳修一（1997）デューイにおける経験の「直接性」(immediacy) について。日本デューイ学会紀要, 38: 39-44.

中野啓明（1998）デューイにおける「第一次経験」と「第二次経験」の関係に関する一考察—学習論の観点から—。日本デューイ学会紀要, 39: 12-17.

西園芳信（2001）デューイ芸術経験論にみる感情の機能についての一考察。日本デューイ学会紀要, 42: 37-44.

作田啓一（1993）生成の社会学をめざして。有斐閣：東京。

讃岐和家（1980）デューイの経験の独自性—教育論の立場から—。日本デューイ学会紀要, 21: 89-94.

佐藤臣彦（1998）スポーツと思想。身体運動文化学会編「身体教育のアスペクト」。道と書院：東京, pp. 2-11.

好並英司（1990）経験について—問題設定—。日本デューイ学会紀要, 31: 126-128.

高橋 徹・井上誠治（2009）スポーツの「身体環境」概念の検討。体育・スポーツ哲学研究, 31(2): 109-120.

渡辺明照（1979）デューイにおける「芸術としての経験」。日本デューイ学会紀要, 20: 106-111.

渡辺明照（1990）デューイの自然主義—経験と質を主題にして—。日本デューイ学会紀要, 31: 142-148.

矢野智司（1999）非知の体験としての身体運動—生成

の教育人間学からの試論―. 体育原理研究, 29: 108
-112.

(平成23年1月5日受付)
(平成23年6月1日受理)

矢野智司 (2009) [オンデマンド版] 子どもという思想.
玉川大学出版部: 東京.

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2011/7/26